

||||||||||||||||||||
原著論文
||||||||||||||||||||

呼びかけと項の独立

——落語に見られる対称人称詞から考える——

東 出 朋

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

Independence of Vocatives from Arguments: Based on Observation of Second Person Pronouns from Rakugo

Tomo HIGASHIDE

(Faculty of Human and Social Studies, Department of International Tourism,
Nagasaki International University)

Abstract

It has been pointed out that the vocative is continuous with an argument contained in the predicate of a sentence, since in many cases “wa” can be added. This paper, however, argues that vocatives and arguments are not continuous but independent. First, the author will review previous studies on the continuity of vocatives and arguments, as well as research by Hayashi, Mizuguchi, and Ogawa (2005), to explore the problems and propose a claim and an improved classification for vocatives. Next, using Rakugo as a medium in which many second person pronouns appear, the author will observe the behavior of second person pronouns that appear in Rakugo based on the new classification. This analysis supports the existence of the function of calling attention which is independent from an argument. In addition, the author will show that the effect of the invocation is different depending on the position of the vocative and the object of attention, which leads to the conclusion that vocatives and arguments occupy different dimensions.

Key words

Vocatives, Arguments, Second person pronoun, Rakugo

要 旨

呼びかけ語は、多くの場合ハの付加が可能であることから、述語の項との連続性が指摘されてきた。しかし、本稿は、呼びかけ語と項は、連続的ではなく、独立的であることを主張する。まず、呼びかけ語と項の連続性に関する先行研究、および林・水口・小川(2005)の論文を概観して問題点を探り、本稿の主張と呼びかけ語の修正した分類方法を提案する。次に、対称人称詞が多数出現する媒体である落語を資料として、新しい分類にもとづいてそこに現れる対称人称詞の振る舞いを観察することで、項性とは独立して呼びかけ語の持つ注意喚起という機能が存在することを検証する。そして、呼びかけ語とそれが注意喚起する対象の前後関係によって呼びかけ語の果たす効果が異なることから、項と呼びかけ語は別の次元であることを示す。

キーワード

呼びかけ、項、対称人称詞、落語

1. はじめに

呼びかけ語とは、対称詞が無助詞で出現しているものを指す。

- (1) a. ふわー。おやっさん、この話ほんまに怖いねえ。
 b. そんなことあるかオマエ¹⁾。みつつぁん、最前死んだゆうたやないか。

(桂枝雀「饅頭怖い」)

対称詞は、指示の方法から2種類に分類される(田窪1997)。「親父」「先生」「社長」などの親族名詞や普通名詞、また「田中さん」「花子」などの固有名詞による対称詞を、名詞が対称詞として使用されているという意味で「対称名詞」と呼ぶ。また、「おまえ」「あんた」などを、いわゆる「人称」を表すという意味で「対称人称詞」と呼ぶ(東出2019)。対称人称詞は人間関係を敏感に反映する要素で、自然談話では使用に制限がある一方、方言談話やフィクションの話し言葉などでは頻繁に観察されるという2面性がある。

話し言葉では無助詞の現象が顕著であることから、呼びかけ語と、いわゆる主語などの命題内の項の判断が困難な場合が多々ある(高橋2005)。また、無助詞現象と呼びかけ語の連続性も指摘されている(丸山1995、前原2000、Maynard 2001、丹羽2006、荏宿2014)。例えば、丹羽(2006:299)は、「山田さん。どこ行っただの。」という文における「山田さん」という語について、無助詞題目なのか呼びかけなのか連続的であり判断できないと述べる。

呼びかけと文内の項の関係を分析した研究に、林・水口・小川(2005)がある。林・水口・小川(2005)は自然談話に無格で出現する「あんた」を分析し、呼びかけと文内の項には連続性があることを主張した。

- (2) a. あんた、グリーンピース嫌いだもんねえ。(A型)

- b. あんた頭いいねえ。(B型)
 c. いやわかれへん、わたし音痴やで、あんた(C型)
 d. それなんか、それ、あんた、一枚、一口いくらなんとかって感じですけどねえ(D型)

(林・水口・小川2005:257-261、原文ママ)

(2)の「あんた」は、(3)に示されるように、A型からD型として分類される。

(3) 「あんた」の分類

A型：述語の直接項である。「は」を付加しても意味は殆ど変わらないが、「は」がないことによって、文の構成要素というよりむしろ文の外に位置しているように感じられる。「は」では見られなかった「呼びかけ」の気持ちが現れてくる。

B型：述語の直接項ではなく、間接項として文に取り込まれている。「は」の付加は可能である。

C型：述語の項ではない。「は」の付加は不可能である。完全に文の外に位置する。程度強調「ほんと」、驚き「なんと」の意味を持つ、一種の文副詞のような機能、文の内容全体を修飾するモデルな意味を持つ。

D型：述語の項ではない。「は」の付加は不可能である。文全体に対して修飾していない。純粋に呼びかけの的である。

(林・水口・小川2005の引用者によるまとめ)

そして、「あんた」の項性はA型からD型へ徐々に弱まり、それと並行して呼びかけ性が強まるという相関関係があると述べた。

しかし、実際にはA型からD型で判断不可能な例も存在する。(4)は落語の一部で、このアンタは、「アンタはそれだけ長生きしている」のように述語の項となるA型なのか、「非常に、

ほんとに長生きしているのに一度も怖いと思ったことはないのか」のように、文に対する程度強調を表すC型なのか、判断困難である。

- (4) 怖さが違うがなそれは。いやアンタそんだけ長生きしてんのに一ぺんも怖いと思うたことほんまにおまへんのかい。

桂米朝「饅頭怖い」

林・水口・小川（2005）の連続体仮説は、多様な振る舞いを見せる1つの要素を統一的スケールで説明し、従来から指摘されてきた呼びかけ語と項の連続性に正面から取り組んだ研究として意義深い。しかし、その分類には幾つかの問題点が見いだされることも事実である。

本稿は、呼びかけ語と項は、連続的ではなく独立的であることを主張する。まず、呼びかけ語と項の連続性に関する先行研究、および林・水口・小川（2005）の論文を概観して問題点を探り、主張と修正した分類方法を提示する。次に、対称人称詞が多数出現する媒体である落語を資料として、新しい分類にもとづいてそこに現れる対称人称詞の振る舞いを観察することで、項性とは独立して呼びかけ語の持つ注意喚起という機能が存在することを検証する。その過程では、出現する位置によって果たす呼びかけ語の注意喚起の効果が異なることから、項と呼びかけ語は別の次元であることを示す。

データとして、市販されたCDに収録されている古典落語『饅頭怖い』（上方落語）3本を選択した。このCDの、マクラ以外の部分を全て文字化した。

- (5) 二代目桂枝雀、1985年9月30日、
 於大阪サンケイホール、40分30秒
 三代目桂米朝、1990年12月18日、
 於大阪コスモ証券ホール、30分37秒
 桂文珍、2004年4月17日、
 於有楽町朝日ホール、28分30秒

2. 先行研究

まず、呼びかけと項の連続性を指摘する先行研究を概観する。次に、本稿に直接関係する林・水口・小川（2005）の研究を紹介しながら問題点を探る。この議論における不備は、統語的基準と呼びかけ語本来の機能を同レベルに扱い、同一スケール上の両極端に位置付けたことである。本稿は、この2つの分類基準を独立したパラメータとして設定し、新たな分類方法を提案する。

2.1 呼びかけ語と項の連続性に関する先行研究

無助詞研究では、ハヤガとの対照において、呼びかけ語の成分と項の連続性が指摘されてきた。次の例で、ハの省略は呼びかけと連続しているとされる。

- (6) a. あんた泣いてんのね。（丸山：1995）
 b. 俺が関口と別れたら、おまえΦ嬉しいか？（野田1996：268）

呼びかけ語と項の連続性が議論される理由は、呼びかけ語が命題の内部にとり込まれる可能性があるからである。前原（2000）は、「[「相手²⁾ = 命題の登場者」ではないものは、専ら呼びかけ語としてしか解釈できないが、「相手 = 命題の登場者」の場合には、呼びかけとも題目とも捉える余地が残される」と述べる。連続性の問題は、つまり、述語の項構造に依存した、統語レベルの問題である。一方、呼びかけ語が命題の内部にとり込まれる可能性がないものは、前原（2000）の指摘する通り、呼びかけ語としてもっぱら注意喚起を行う。(7)において、呼びかけ語と項の連続性は問題にならない。

- (7) a. ふわー。おやっさん、この話ほんまに怖いねえ。
 b. そんなことあるかオマエ。みつつあん、最前死んだゆうたやないか。（(1)再掲）

つまり、呼びかけ語の解釈は述語との関係に依存していると言える。

2.2 林・水口・小川 (2005) の概観と問題点

林・水口・小川 (2005) は、文内の項は命題との関わりにおいて連続的で、呼びかけの要素と項には相関関係があるという連続体仮説を提示した。林・水口・小川 (2005) は、語順などの統語構造にしたがって作られ、述語が要求する項構造を満たしたものが文で、それが実際に発せられたものを発話として考えている。そのうえで、日本語の実際の発話では、項の数が足りない場合ばかりでなく、述語が要求する項の数より多い要素が現れる場合があるという。そのような要素として、「あんた」は、呼びかけ詞、または話者の心的態度を表すものとして現れる。林・水口・小川 (2005) は、まず、述語の項であるか否かという「文的」解釈のレベル、そして「文的」解釈ができない場合は「発話的」解釈がなされるとして、AからDの4つの型に分類した。

(8) 「あんた」の分類

A型：述語の直接項である。「は」を付加しても意味は殆ど変わらないが、「は」がないことによって、文の構成要素というよりむしろ文の外に位置しているように感じられる。「は」では見られなかった「呼びかけ」の気持ちが現れてくる。

B型：述語の直接項ではなく、間接項として文に取り込まれている。「は」の付加は可能である。

C型：述語の項ではない。「は」の付加は不可能である。完全に文の外に位置する。程度強調「ほんと」、驚き「なんと」の意味を持つ、一種の文副詞のような機能、文の内容全体を修飾するモーダルな意味を持つ。

D型：述語の項ではない。「は」の付加は不

可能である。文全体に対して修飾していない。純粹に呼びかけの的である。

(3)再掲)

問題は4点ある。あらゆる分類ではその基準の立て方が重要であるが、ここにも分類基準に関する問題がみられる。1つ目は述語の項の分類基準に関する問題、2つ目はC型とD型の分類の妥当性に関する問題、3つ目は分類基準の独立性に関する問題である。そして、4つ目は呼びかけ語の位置に関する問題である。

問題1：述語の項の分類基準

まず、ハの付加が可能であるか否かという基準は、述語の項であるか否かを判断する基準として適切ではない。A型とB型は、ともにハの付加が可能であり、命題の項として取り込まれるという。しかし、(9)のアンタは述語が要求する直接項であるが、ハを付加するのは不自然である。あえて付加するならば、それぞれニとガであろう。

- (9) a. アンタお見舞いたいという人が来たはりまんねけど。 (枝雀)
b. ごちそうさまやないが。アンタ饅頭が怖いちゅうさかいみなどで饅頭こうてきたんやないか。 (枝雀)

次に、A型とB型を区別する必要性が低い。林・水口・小川 (2005) は、B型について、「象は鼻が長い」という二重主語構文に言及した上で、間接項として文に取り込まれうると述べる。確かに、ハを付加した場合、「嫌い」の直接項としての「あんた」(10a)と、「頭がいい」という文の「[外の主語]」或いは「主題」(同上：259)としての「あんた」(10b)は、文における位置づけが異なる。

- (10) a. あんた (は/Φ)、グリーンピース嫌いだもんねえ。(A型)

b. あんた (は/Φ) 頭いいねえ。(B型)

しかし、ハがない場合、そのアンタは下位分類を要するほど項の性質が異なると考えるのは難しい。直接項でハを付加できる例 (10a)、直接項だがハではなくガやニを付加せざるを得ない例(9)、そして間接項でハを付加できる例 (10b)、この3つのバリエーションにおいて、項性の積極的な区別を要するほどの大きな違いがあると考える根拠は弱い。その必要性も低い。

以上2つの理由から、述語と呼びかけ語が統語的に結びつきうるか否か、という基準で十分であると考ええる。

問題2：C型とD型の分類の妥当性

林・水口・小川 (2005) は、C型とD型の区別を強く主張する。

- (1) C型とD型は大きく異なっている。その違いは聞き手の注意を喚起する動機にある。前者では強調、意外性・驚きの提示、確認という動機が存在し、その意味で「あんた」はまるで一種の文副詞のように後続の文全体を修飾している。つまり、「あんた」は後続の文と全く無関係とはいえないのである。ところが後者では「あんた」は後続文とは一切関わりを持たない。純粹に聞き手の注意を向けるだけである。(同上：267)

そして、分類の具体的な方法として、程度強調の「ほんと」、また、意外性や驚きの「なんと」との置き換えテストを挙げ、置き換え可能であればC型、不可能であればD型としている。(12a)は「ほんと」、(12b)は「なんと」との置き換えが可能だと言う。

- (2) a. いやわかれへん、わたし音痴やで、あんた (同上：260、原文ママ)
 b. 日本帰ったら、あんた、三宮の地べたに売ってるやんか (同上：260、原文ママ)

しかし、「ほんと」や「なんと」の置き換えテストの有効性は低い。(13)の「あんた」はC型として提示されている³⁾。

- (13) A：そら、歴史が違うからね、そらし方のないことや
 B：うん
 A：ねえ、他人やねんから、なんちゅうても
 B：長い人生ね
 A：うん、うん、それがあんた、きょうはまたあんた、連れて行ってもろてあんた、加藤トキ、もうそんな遠い存在の人やおもてたけど、あんなええ
 B：結構よかったねえ
 A：よかったわあ (同上：264、原文ママ)

この「あんた」について、まず、「コンサートに連れて行ってもらった」ことの強調であると説明した上で、「あんた」を三回繰り返すことにより、さらなる強調というより、命題に関する強調から「言表態度」(この場合は「感謝の気持ち」)に関する強調にシフトしているように思われる」(同上：264)と述べる。しかし、「コンサートに連れて行ってもらった」ことの強調であるという点について、まず、「ほんと」「なんと」の置き換えテストができないことから同意しかねる。さらに、命題に対する強調から言表態度に関する強調にシフトしているという点についても、その根拠が不明である。(14)のオマエは、後続文に対する純粹な注意喚起のD型とも、「(同じ話ばかりするというのは)とても能がないことだ」という意味で程度強調のC型とも分類可能だろう。

- (14) いっつもかつつもオマエ、友達仲間が寄りゃあこれやっちゃうのもオマエ、能がないやないかい。曲がないやないかい。な？ (枝雀)

つまり、「文副詞」や「文の内容に対して一種のモダリティー的な「修飾」⁴⁾を行っている」というC型の基準として、「ほんと」や「なんと」の置き換えテストは有効ではないと考える。

次に、C型とD型の大きな違いとして挙げられている「聞き手の注意を喚起する動機」も判断しがたい。林・水口・小川(2005)は呼びかけの動機について次のように述べる。

(15) 注意喚起の呼びかけは、話し手が聞き手に対して、これから述べることは特に注意して欲しいという気持ちを表す一種のマーカであると考えられる。なぜ注意して聞いて欲しいかという動機には、(中略)意外性・驚きの提示や強調(C型)から積極的な注意喚起(D型)まで様々である。(同上:265)

しかし、注意喚起のために呼びかける動機として強調や積極的な注意喚起がある、という指摘は、同語反復である。また、強調や驚きの提示、確認という動機を判断することができない。

さらに、C型の特徴として林・水口・小川(2005)が指摘する「発話・伝達のモダリティー」は、C型以外にも当てはまるという事実がある。林・水口・小川(2005)は、「あんた」が使えるためには「発話・伝達のモダリティー」(仁田1991、1997)が必要であると述べる。(16a)は「発話・伝達のモダリティー」がないので不適格で、(16b)はそれがあるので適格であるとされる。さらに、「発話・伝達のモダリティー」がある場合、「大(嫌い)」によって強調の意味が大きい(16b)のほうが、(16c)より落ち着きが良くなるとも言う。

(16) a. *僕は、あんた、納豆は大嫌い。
b. 僕は、あんた、納豆は大嫌いなんだよ。
c. ぼくは、あんた、納豆は嫌いなんだよ。
(同上:263、原文ママ、下線引用者)

また、(17a)は「一人で感嘆しているので「発

話・伝達のモダリティー」は必ずしも出てこない」ため不自然であるのに対し、(17b)は「「ねえ」を用いることによって相手の同意を求める意味合いが出て」(同上:263)、適格と判断される。

(17) a. ?きれいな月だなあ、あんた。
b. きれいな月だねえ、あんた。
(同上:263、下線引用者)

ここで、仮に、「よ」や「ね」という要素が「発話・伝達のモダリティー」であり、それがあるがゆえに(16b、c)と(17b)が適格であるとするならば、これはC型の特徴ではなくA型からD型の全てに通じる特徴である。

(18) a. あんた、グリンピース嫌いだもんねえ。
(A型)
b. あんた頭いいねえ。(B型)
c. いやわかれへん、わたし音痴やで、あんた(C型)
d. それなんか、それ、あんた、一枚、一口いくらなんとかっていう感じですけどねえ(D型)
(同上:257-261、(2)再掲、下線引用者)

ただし、仁田(1991、1997)は、程度の差こそあれ全ての文が言表事態めあてのモダリティーと発話・伝達のモダリティーをともに有しているという立場をとっており、この意味で、(17a)が「言表事態めあてのモダリティーしかないので不適格」(同上:263)とは言えない。林・水口・小川(2005)の要点は、「よ」や「ね」などの終助詞がないために呼びかけの座りが悪いということだと思われる。

以上の理由から、C型とD型を積極的に区別する必要性は低いと考える。

問題3：分類基準の独立性

林・水口・小川(2005)は、「項性」と「呼びかけ性」⁵⁾を同じスケールに並べ、A型からD

型という連続に位置付けた。そして、この2つの基準を反比例するものとして捉え、項性が弱まるにつれ呼びかけ性は強まると考えた。

しかし、「項性」と「呼びかけ性」は同じレベルの基準ではなく、同一のスケールで測れるものではないと考える。前者は、述語を中心に見た、「述語と呼びかけ語の統語的關係」に着目した基準である。前節でみた他の先行研究でも、呼びかけ語と項の連続性が指摘されるのは述語と呼びかけ語が統語的に結びつきうる例であった。述語と呼びかけ語の統語的關係は、結びつきうるか否か、という「+/-」の素性で表しうる。何らかの助詞を付与することができれば、述語と結びついて命題の中に取り込まれることとなる。一方、後者は、述語との関係ではなく、「注意喚起」という機能に着目した基準である。この2つは、一方が弱まれば他方が強まるという反比例しうる対立基準ではなく、独立して存在する基準だと考える。

以上の議論から、「述語と呼びかけ語の統語的關係」というパラメータと「注意喚起」のパラメータを、同一スケール上に位置付けうる対立的なものではなく、独立して存在する別のものと見る必要がある。

問題4：呼びかけ語の位置に関する考え方

問題1から問題3は分類基準に関する問題点であったが、もう1点検討すべき問題がある。それは、呼びかけ語とそれによって注意喚起される対象の位置関係に関する問題である。林・水口・小川(2005)は、(1)(5)に見られるように、呼びかけ語は「これから述べることは特に注意して欲しいという気持ちを表すマーカー」で、「後続」文を修飾したり、純粹に呼びかけとして機能したりすると考える。その一方で、(2c)や(7)のように、呼びかけ語が発話末に見られる例、つまり、前接する部分を強調する例も挙げている。確かに、呼びかけ語によって注意喚起される発話はたいていの場合後続部分であると推察されるが、実際は、前接する部分のときも

ある。したがって、「これから述べることを特に注意してほしいという気持ちを表すマーカー」ではなく、「呼びかけ語の後か前に特に注意してほしいという気持ちを表すマーカー」であると考えられる。

呼びかけ語の後に注意喚起の対象が続く場合と、注意喚起の対象の後に呼びかけ語が続く場合では、その効果は異なる。まだ述べられていないこと（これから述べること）に聞き手の注意を向けさせる場合、呼びかけ語は注意喚起しかできない。しかし、すでに述べられたことに聞き手の注意を向けさせる場合、呼びかけ語はその確認や念押しとなりうる（cf. 神部2003）。つまり、呼びかけ語と、それが注意喚起する対象の位置関係は重要である。

3. 主張と新たな分類基準の提案

林・水口・小川(2005)の分類基準を概観して指摘した問題点は次の4点であった。

- (19) a. 述語の項であるか否かの判断基準
- b. C型とD型の分類の妥当性
- c. 分類基準の独立性
- d. 呼びかけ語と注意喚起の対象の位置関係

そして、それぞれに対して、次のような修正案を提示した。

- (20) a. 述語と呼びかけ語が統語的に結びつきうるか否か、という基準で十分である。
- b. C型とD型を積極的に区別する必要はない。
- c. 統語レベルのパラメータと発話における機能としての注意喚起のパラメータを独立したものとして立てるべきである。
- d. 呼びかけ語と、それが注意喚起する対象の位置関係（前後関係）を見る必要がある。

以上の議論を踏まえて、本稿は、呼びかけ語と項は連続的ではなく独立的であることを主張する。修正案から導かれる分類基準は、統語レベルのパラメータにしたがい、I型とII型の2つである。

- (2) I型：呼びかけ語が統語的に述語の項にならない。
- II型：呼びかけ語が統語的に述語の項になる。

I型とII型は、基本的には形式的判断が可能である。また、呼びかけ語とそれが注意喚起する対象の前後関係も分析の観点として取り入れる必要がある。したがって、本稿は、I型とII型、そして呼びかけ語と注意喚起の対象の前後関係という2つの指標からなる、4つの側面における注意喚起の性質を分析する(表1)。4つの側面を、便宜上、ア、イ、ウ、エと名付ける。

表1. 分析の指標

		呼びかけ語と注意喚起の対象の前後関係	
		呼びかけ語→対象	対象→呼びかけ語
呼びかけ語と述語の項の統語的結びつき	I型	ア	イ
	II型	ウ	エ

なお、林・水口・小川(2005)の分類と本稿の分類の関係性は表2の通りである。林・水口・小川(2005)の言う、項性の弱いもの、すなわち呼びかけ性の強い2つをI型、項性の強いもの、すなわち呼びかけ性の弱い2つをII型とした。

表2. 林・水口・小川(2005)と本稿の分類

分類基準		A型	B型	C型	D型
林・水口・小川(2005)	項性	強		弱	
	呼びかけ性	弱		強	
本稿	呼びかけ語と述語の項の統語的結びつき	II型		I型	

4. データの特徴及び分析方法

本稿で用いるデータは落語である。落語を分析対象とした理由とその留意点を述べた後、分

析方法を説明する。

4.1 データの特徴

本稿で落語を分析データとして取り上げる理由は2つある。1つは、落語は複数人間でのインタラクションが物理的に1人の人間の発声として聴衆に分かるように表現されるため、複数人間での「呼びかけ」と「(項としての)言及」が明示的かつ線形的に観察できるからである。物理的に複数名でインタラクションがなされる場合、例えば日常談話では、身振りや視線といったマルチモーダルな情報の助け、及び人間関係の影響によって対称の呼びかけや項としての言及が回避でき、呼びかけと項を同時にかつ十分に観察することが困難である。落語は対称の呼びかけと言及がなされる必要性が高いという点で、その2つを同時に分析するのに適していると考える。もう1つは、落語は怒りや愛情などの多様な感情表現の場面を含んだ言語資料であり、のちに説明するように、呼びかけによって示される注意喚起の対象が観察しやすいと考えるためである。

落語を分析データとして選択する上で考慮しなければならないことを2点指摘する。まず、発話の自然さと即時性についてである。自然談話は、事前の準備がなく、その場で瞬間的に産出される。それに対し、落語は、創作され、練習を重ねられた話し言葉の芸術であり、フィクションである。しかし、同時に、演者(噺家)は、聴衆に受け入れられるような会話の自然さを目指しつつ、言い間違えたり修正したりしながら一瞬一瞬考えて話すという、即時的な側面もある。つまり、自然談話を目指したフィクションである。とはいえ、自然談話とは大きく異なるため、対称人称詞の使用も自然談話と同じと言えないことは忘れてはならない。

次に、話し手と聞き手という用語に関する問題がある。落語における発話は、「演者が聴衆に直接語りかけるものと、演者が物語の登場人物となり登場人物の会話として表現される」(李

2006:59) ものがある。そして、後者は「物語の登場人物の発話でありながら、物語を聴衆に聞かせる演者の語りでもある」という点で、落語の談話は「二重構造」(野村1994)を成している。つまり、落語の中の発話は、「演者から聴衆への発話」、「物語の登場人物の独話」、「物語の登場人物同士の対話」という3種類に分類できる。しかし、本稿では、演者から直接聴衆へ向けた発話は分析対象としない。つまり、物語の内部だけを分析する。そして、「二重構造」を考慮して、登場人物Aが別の登場人物に向けて話しているとき、登場人物Aとその物理的な人物である演者を「話し手」、別の登場人物と聴衆を「聞き手」と捉えることとする。落語において、「話し手」は常に演者であり、最も重要な「聞き手」は聴衆であるからである。

4.2 分析方法

まず、落語の文字化データから対称人称詞を全て抽出した。次に、無助詞で出現している対称人称詞を、新たな分類であるI型とII型に分けて、それぞれについて呼びかけ語としての注意喚起の機能を検証する。

5. 分析

問題4で議論した通り、呼びかけ語と注意喚起する対象の前後関係も含めて観察しなければならない。以下では、I型、II型ともに、呼びかけ語とその注意喚起の対象の前後関係を2つに分けて分析する。まず、述語の項となりえないI型における注意喚起の方法を分析する。次に、述語の項となりうるII型においても注意喚起の機能があることを示す。最後に、呼びかけ語が発話末に位置する場合、I型とII型という統語的パラメータと関係なく、同じ注意喚起の機能があることを示す。

5.1 I型

I型は、呼びかけ語が統語的に述語の項にならないタイプである。呼びかけ語と、話し手が

聞き手の注意を向けさせたい対象の前後関係について、【呼びかけ語→注意喚起の対象】と【注意喚起の対象→呼びかけ語】の2つに分けて観察する。I型は聞き手に対する注意喚起を行っているが、位置によってその効果は異なる。

5.1.1 【呼びかけ語→注意喚起の対象】

まず、呼びかけ語に続いて注意喚起の対象が発せられるもの【呼びかけ語→注意喚起の対象】を観察する。②は、呼びかけ語の後続発話が話し手の注意喚起の対象と考えられる例である。この呼びかけ語の構造的な特徴は、文節⁹⁾の後に挿入される点である。それぞれ、「勘定が」「(どこが) いいか」というと「人間が」の後には、何か続かねばならない。

- ② a. で、うちィ持って帰ってよう勘定してみちゅうとやな、札やら銀貨やら取りませになってやで、これが、勘定がオマエ、二十三万四千五百六十七円八十九銭
(米朝)
- b. どこがええちゅうたかてオマエあのレンコンのこのねえ、あの穴のこんがり揚がったとこね。
(枝雀)
- c. 当たり前じゃい、オホン。人間がオマエ、狐や狸を怖がるちゅうなそもそも間違うたるわい。
(米朝)

話し手が呼びかけ語を発する時点では、話し手にも聞き手にも注意喚起の対象は開かれている。話し手は、呼びかけ語を用いて聞き手の注意を後続部分へと導く。(22a)でオマエは、笑うべき箇所、つまり、細かすぎる金額を述べる前に位置する。(22b)のオマエは、レンコンの「どこがええ(いい)」かという問いに対して、「レンコンの穴のこんがり揚がったとこ」が好きと答える、その答えの直前に位置している。(22c)は「人間(という立派な生き物)が狐や狸を怖がるなんて間違っている」という内容で、「大間違いだ」という主張の前に位置する。い

ずれも、話し手にとって最も伝えたい部分の直前に位置している。

聞き手は、呼びかけ語を聞いて、発話の流れに沿って注意喚起の対象を解釈する。(22a)では、「勘定が」の後には、通常、高いや安いなどの値段に対する評価が続くはずであり、聞き手は「勘定」がどうなのか考えるだろう。(22b)では「どこがええ(いい)」か、(22c)では「人間が」どうなのか、説明が続くと予測する。こうして、聞き手の注意は、これから述べられることへと向かう。

5.1.2 【注意喚起の対象→呼びかけ語】

次に、注意喚起の対象を述べてから呼びかけ語が発せられるもの【注意喚起の対象→呼びかけ語】を観察する。㉓は、前接部分が話し手の注意喚起の対象と考えられる例である。この呼びかけ語の構造的な特徴は、(ほとんどの例で)述語の直後に位置する点である。しかし、もちろん、この述語は呼びかけ語と統語的には結びつかない。

- ㉓ a. みっつぁん死んでるちゅうことがわかったらえらいことになるぞオマエ。ええ。巡査が飛んでくるわな。刑事が来よるやろ、警察医から、署長。(米朝)
- b. ものが違いすぎるやないかいオマエ。妙なもんが好っきゃな一えー。(枝雀)
- c. そうなったらよけい聞きたいがなアンタ。何が怖い。(米朝)
- d. 気色悪いがなアリちゅう奴はオマエ。こう、チョコチョコチョコと歩いてる。(米朝)

話し手は、すでに述べた内容が注意喚起の対象であることを、呼びかけ語によってマークする。注意喚起の対象は既定であるため、呼びかけ語はその既定の内容の押し付けの効果を生む。(23a)では、「みっつぁんが死んでいるということが分かったらえらいことになるぞ」と述べ

たあと、その感想に聞き手の注意を要求する。(23b)では「(比べている)ものが違いすぎるじゃないか」という話し手の驚き、(23c)では「(そんなに答えを嫌がるなら)余計聞きたい」という話し手の願望に聞き手の注意を向けようとする。(23d)では、「アリという生き物は気色が悪い」という意見に聞き手の注意を向けさせ、聞き手に押し付けている。

聞き手は、呼びかけ語が発話末にあることから、既に述べられたことへ遡及的に注意を向けるしかない。それぞれ、「えらいことになるぞ」、「ものが違いすぎるじゃないか」、「余計聞きたい」「アリという生き物は気色が悪い」という直前の発話を注意喚起の対象として捉え直させられることになる。

I型は、呼びかけ語が統語的に述語の項にならないため、もっぱら当該発話への注意喚起を行っている。しかし、【呼びかけ語→重要な部分】という配列の㉔と、【重要な部分→呼びかけ語】という配列の㉕では、注意喚起の効果が異なる。【呼びかけ語→注意喚起の対象】では発話の流れに沿って注意喚起が行われるのに対し、【注意喚起の対象→呼びかけ語】では発話の流れに反して注意喚起が行われる。後者は、注意喚起の対象がすでに述べられているがゆえに、押し付けという効果がある。

5.2 II型

II型は、呼びかけ語が統語的に述語の項になるグループである。呼びかけ語と述語の前後関係について、【呼びかけ語→述語】と【述語→呼びかけ語】の2つに分けて観察する。

5.2.1 【呼びかけ語→述語】

㉖は、呼びかけ語が述語の前に位置する例【呼びかけ語→述語】である。「あんたは面白い」「おまえは考えてみろ」「あんたにお見舞いしたいという人が来ている」「あんたが饅頭が怖いというから」と、対称人称詞の呼びかけ語は述語の項として解釈される。

- ㉔ a. いつも楽しいしてくれてありがとう。
 アンタ面白いわ言うことがな。(文珍)
 b. そらオマエ考えてみい。(米朝)
 c. アンタお見舞いしたいいう人が来たは
 りまんねけど。(枝雀)
 d. ごちそうさまやないが。アンタ饅頭が
 怖いちゃうさかいみなで饅頭こうてきた
 んやないか。(枝雀)

対称人称詞の呼びかけ語が述語の項として解釈されえても、注意喚起の機能が打ち消されることはない。無助詞で呼ばれた聞き手は必ず注意を喚起される。項としての解釈と注意喚起は共存している。

5.2.2 【述語→呼びかけ語】

㉕は、呼びかけ語が述語の後ろに位置する例【述語→呼びかけ語】である。㉕の対称人称詞の呼びかけ語は、㉔と同様に、述語の項として解釈されうる。「あんたはなにを言ってるのか」「おまえは顔がほどけている」「おまえはどこか抜けているな」「おまえはお饅という虫を知っているか」と、述語の項になりうる。

- ㉕ a. なーに言うてなはんねアンタ。聞きと
 おすことができるかなって、怖いいうたっ
 て話でっじゃないかできます。(枝雀)
 b. 顔ほどけてるでえオマエ。(枝雀)
 c. どっか抜けたあんなオマエ。(枝雀)
 d. お饅ちゅう虫知ってるかオマエ。
 (米朝)

ここでも、㉔と同様に、対称人称詞の呼びかけ語による注意喚起の機能が打ち消されることはない。呼びかけ語が述語の後ろに位置するため、注意喚起する対象は前接する内容である。㉕の対称人称詞の呼びかけ語は、注意喚起を行い、押し付けの効果がある。(25a)では「なーに言うてなはんね」という話し手の呆れに、(25b)と(25c)では「顔ほどけてるで」「どっか抜け

たあんな」という話し手のツッコミに聞き手の注意を向け、それを聞き手に押し付けている。(25d)では「お饅ちゅう虫知ってるか」という質問に聞き手の注意を向け、質問を聞き手に改めて持ち掛けている。

述語と呼びかけ語が統語的に結びつきうるか否かを判断するのも困難な例が存在する。㉖のオマエは、「こんな時刻だぞオマエ」というI型なのか、「(もう遅いから)オマエ(は)泊まって帰ったらいい」というII型なのか、判断困難である。

- ㉖ 何を言うとなんじゃいもう今日は、こんな時刻やでオマエ泊まって帰ったらええがないや。
 (文珍)

㉗のオマエは、「オマエは話を聞く」という文における後置された項なのか、「オマエは晩に一人で便所へ行けない」という文における項なのか、どちらの述語の項なのか判断できない。

- ㉗ その代わりなんやで、この話を聞いてオマエ、晩に一人で便所へ行けんちゅうなことになるてもわしは知らんけどな。(文珍)

㉘も判断が困難である。オマエ¹⁾は、「オマエは大阪の人間なのか」という意味で述語の項である。オマエ²⁾は、「オマエは大阪の人間なのか」という文における後置されたオマエと考えた場合、述語の項と言える。しかし、その場合、オマエ¹⁾と同じ意味で述語の項と言えるか、定かではない。

- ㉘ オマエ¹⁾ 大阪の人間かオマエ²⁾。(枝雀)

述語との統語的結びつきというパラメータでは、項としての解釈が揺れる場合がある。しかし、統語的なパラメータと注意喚起という機能のパラメータを独立したものとして設定すれば、統語的な解釈が不完全でも注意喚起はなされる

ことを認めることができる。

- b. 今日は来ないよ／だろう、お客さんは。
(同上：230、下線ママ)

5.3 統語的パラメータと注意喚起の独立性

I型でもII型でも、呼びかけ語がその注意喚起の対象に後置する場合、ともに注意喚起を行い押し付けの効果があることを見た。つまり、統語的パラメータと注意喚起の機能は独立していると言える。本節では、呼びかけ語が注意喚起の対象に後置する場合の構造を分析し、統語的パラメータとかかわりなく注意喚起が機能することを示す。

I型とII型ともに、対称人称詞の呼びかけ語が前接する部分を注意喚起する例があった。

- (29) a. みっつぁん死んでるちゅうことがわかったらえらいことになるぞオマエ。
(I型)((23a)再掲)
b. なーに言うてなはんねアンタ。
(II型)((25a)再掲)

これらの例は、構造上、後置文と呼ばれるものと類似している。日本語は動詞が文末に来るSOV型の言語であるが、話し言葉において頻繁に語順の逆転が起こることはよく知られている。

- (30) 何を考えてんねんオマエは。(枝雀)

標準的な書き言葉においては動詞に先行する文の要素が、(30)のように、話し言葉において動詞の後ろに置かれたものは、後置文、倒置文、右方転移文などと呼ばれ、数多く研究されてきた(久野1978、高見1995、藤井1991、1995、江口2000、綿貫2006、黒木2006)。高見(1995)は後置文を情報構造の観点から分析し、その中で次のような例を挙げている。

- (31) a. *太郎は殴った、花子を。
b. (僕は)殺してしまったんだ、恋人を。
(同上：230、下線ママ)

- (32) a. ?*今日は来ない、お客さんは。

(31a)(32a)のように、動詞が単純形で終わる場合、後置文は不適格である。しかし、(31b)(32b)では、話し手が動詞に何らかの「要素をつけ加えることによって、その部分を強調しているため、この部分が話し手の特に伝達したい部分、つまり重要度が高い情報として解釈され」(同上：231)、後置文が適格となる。情報構造として、動詞の部分が話し手の特に伝達したい部分であり、後置要素は「その発話に関係のある要素が後ろに付加」(綿貫2006)された部分である。この後置文の特徴はそのまま呼びかけ語に当てはめることができる。(29)において、話し手は呼びかけ語で前接する述語に聞き手の注意を向けさせる。呼びかけ語は「その発話に関係のある要素」として「後ろに付加」されている。

後置文における前置要素としての「述語」に着目した指摘はいくつかあるが、述語の「終助詞」の重要性は指摘されていない。高見(1995)は、後置文が許容されるためにはその動詞が強調されている必要があると述べたが、モダリティや終助詞という要素については言及していない。林・水口・小川(2005)は、仁田(1991、1997)の「発話・伝達のモダリティ」を引き合いに出したが終助詞については言及していない。江口(2000)は「後置文の先行部分には必ず述語動詞が現れている」(同上：87)と述べる。本稿は、高見(1995)、林・水口・小川(2005)、江口(2000)の指摘をさらに一歩進めて、発話末の呼びかけ語が許容されるためには、述語の終助詞との共起の必要性を指摘する。

発話末に呼びかけ語が位置する例では、必ず、述語になんらかの終助詞がなければならない。

- (33) a. みっつぁん死んでるちゅうことがわかったらえらいことになるぞオマエ。

((23a)再掲)

- b. ??みっつぁん死んでるちゅうことがわ
 かったらえらいことになるオマエ。
- ③4 a. 誰が三番を尋ねてんねんオマエ。
 (枝雀)
- b. ??誰が三番を尋ねてるオマエ。
- ③5 a. きゃーばたばたはみっつぁんが言うね
やオマエ。(枝雀)
- b. ??きゃーばたばたはみっつぁんが言う
 オマエ。
- ③6 a. なーに言うてなはんねアンタ。
 (枝雀) ((25a) 再掲)
- b. ??なーに言うてなはるアンタ。
- ③7 a. どっか抜けたあんなオマエ。
 ((25c) 再掲)
- b. ??どっか抜けたオマエ。
- ③8 a. お饅ちゅう虫知ってるかオマエ。
 ((25d) 再掲)
- b. ??お饅ちゅう虫知ってるオマエ。

③3~③5はI型、③6~③8はII型、(a)は終助詞のあるオリジナルの発話、(b)は終助詞のない作例である。(33a)のゾ、(34a)のネン、(35a)のネヤ、(36a)のネ、(37a)のナ、(38a)のカという終助詞の直後に対称人称詞の呼びかけ語が位置する。終助詞がない作例は容認度がかなり下がる⁷⁾。

呼びかけ語が後置される場合、通常、その述語は終助詞を伴うが、終助詞がない例もまれに観察される。しかし、その場合でも、聞き手の存在を前提とする「発話・伝達のモダリティ」(仁田1991、1997)がなければならぬ。③9では聞き手に対する働きかけ(否定命令)が述語で表現されているため、対称人称詞の呼びかけ語の後置が許容される。

- ③9 嘘つけオマエ。狐がそんなとこで洒落言う
 たりするかいな。(米朝)

前述の(38b)においても、疑問のイントネーションを伴うことによって述語で聞き手に対する働きかけが表現されれば、対称人称詞の呼びかけ語の後置が許容されるだろう。

5.4 まとめ

本節では、まず、統語的パラメータに基づいたI型とII型という分類ごとに、それぞれにおける注意喚起の機能の現れ方を分析した。I型は述語の項になりえないためもっぱら注意喚起しかしないが、呼びかけ語が述語に後置する場合には、押し付けの効果がある。II型は述語の項としての解釈がなされるが注意喚起も同時に行われ、呼びかけ語が述語に後置する場合には、I型同様、押し付けの効果がある。次に、呼びかけ語が注意喚起の対象に後置する場合、その要素は終助詞を伴う述語であることを観察した。ここから、統語的パラメータであるI型とII型にかかわらず、構造的な類似に基づいた注意喚起の機能があることを示した。

6. 考 察

本稿は、無助詞の対称詞は注意喚起の機能があるという前提に立ち、呼びかけ語の成分と述語の統語的結びつき、そして呼びかけ語とそれが注意喚起する対象の前後関係という2つの観点から、呼びかけ語の注意喚起の機能について分析した。この2つの観点に基づいた前節までの分析は、次の図のようにまとめられる。上半分はI型、下半分はII型である。アとウは呼びかけ語の後に注意喚起の対象が位置することを示し、イとエは注意喚起の対象の後に呼びかけ語が位置することを示している。上半分の横線はもっぱら注意喚起に特化していることを示し、右半分の縦線は注意喚起による押し付けの効果を示している。イは横線と縦線が重なっている。



図1. 呼びかけ語の統語的パラメータ、前後の位置、注意喚起の関係

それぞれの具体例は次の通りである。

- (40) a. 人間がオマエ、狐や狸を怖がるちゅう
 なそもそ間違うたるわい。 (ア)
 b. みっつぁん死んでるちゅうことがわかつたら
 えらいことになるぞオマエ (イ)
 c. そらオマエ考えてみい。 (ウ)
 d. なーに言うてなはんねアンタ。 (エ)

上下で示されるI型/II型という統語的パラメータとは独立して、イやエに示される、呼びかけ語が後置することによる注意喚起の押し付けという効果がある。統語的パラメータと注意喚起の機能は独立していると言える。

前接する内容を注意喚起するために終助詞が必要なことは、本質的に対人的要素である対称人称詞と、同じく対人的要素である終助詞の親和性が高いからであると考えられる。1節で述べた通り、対称詞は2種類に分類することができる。固有名詞、そして親族名称、職階などの対称名詞は、対称を記述しているという意味で定記述の名詞類である(田窪1997)。「さん」や「ちゃん」、「様」によって人間関係(親疎や上下、待遇)も補足的に示されるが、本質的に対称の「記述」であることに変わりはない。それに対し、対称人称詞は「聞き手」を直示的に指示するだけである。つまり、具体的な意味はなく、「聞き手」のみを示している。

終助詞は共通語にも方言にも様々な種類があるが、㉓～㉘に見られる終助詞はいずれも聞き手の存在を前提とした終助詞である。「終助詞は、それぞれ個性があり、体系化は困難」だが、

「聞き手めあてかどうかというのは、終助詞の性質を考えるために重要な観点」(宮崎・足立・野田・高梨2002:264)である。

本稿は、呼びかけ語と述語との統語的結びつきと、呼びかけ語とそれが注意喚起する対象の前後関係という2つの観点を設定したからこそ、呼びかけ語が後置される例において、終助詞を伴う述語との共起の必要性を指摘できた。

7. ま と め

対称人称詞の呼びかけ語は、実際の発話で、述語との関わりにおいてきわめて多様な振舞いをしている。呼びかけ語は、多くの場合ハの付加が可能であることから、述語の項との連続性が指摘されてきた。しかし、本稿は、呼びかけ語と項は、連続的ではなく独立的であることを主張した。呼びかけ語は、後続部分のみならず前接部分を注意喚起の対象としうる。呼びかけ語と、それが注意喚起する対象の前後関係によって、呼びかけ語の果たす効果が異なる。呼びかけ語が述語の後ろに位置する場合は、終助詞との共起が必須である。終助詞は対人的要素であるため、聞き手そのものを意味する対称人称詞と親和性が高いと考えられる。

最後に今後の課題を述べる。本稿は、落語という特殊なデータを用いた分析であるため、その結果を安易に自然談話一般に当てはめることはできない。そもそも東京方言を規範にした現代の標準的な日本語では対称人称詞の使用に強い制約があるため、本稿の分析は、今なお対称人称詞が頻繁に観察される方言談話研究へ応用が可能と考えられる。落語に見られた、対称人称詞の呼びかけ語と発話末の終助詞の共起という現象は、国語学や方言研究において従来指摘されてきた、人称詞の終助詞化という言葉変化と合致するものである。対称人称詞の呼びかけ語が共起する終助詞の種類や発話・伝達モダリティの種類、談話の種類による対称人称詞の振る舞いの違いなどについては、今後の課題とする。

注

- 1) 本稿が用いる落語のデータにおける対称人称詞は、注目箇所としてカタカナで表記する。その他は原文のまま引用する。
- 2) 聞き手のこと。
- 3) むしろ、林・水口・小川（2005）の分類基準にしたがうと、純粹に聞き手の注意を喚起するだけで後続文に対しては一切修飾のないD型に該当すると思われる。
- 4) 「モーダルな意味」という用語も用いている。
- 5) 「呼びかけ度」という用語も使用されている。
- 6) 話し言葉の分析単位の1つである（国立国語研究所2006）。
- 7) 作例の容認度判断は筆者による。より客観的な議論のためには多くの用例を収集して観察・分析する必要があるが、それは今後の課題とする。

参考文献

江口巧（2000）「日本語の後置文—情報提示の方略—」『言語文化論究』12, 81-93, 九州大学言語文化研究院

荏宿紀子（2014）「談話における対称詞のいわゆる「無助詞」現象—呼びかけの周辺—」小林賢次・小林千草（編）『日本語史の新視点と現代日本語』187-205, 勉誠出版

神部宏泰（2003）「近畿西部方言の間投表現法」『ノートルダム清心女子大学紀要—日本語・日本文学編』27(1), 1-11, ノートルダム清心女子大学

久野暉（1978）『談話の文法』大修館書店

黒木暁人（2006）「日本語右方転移文の構造について：左方移動分析の観点から」『Scientific approaches to language』5, 213-231, 神田外国語大学

国立国語研究所（2006）「国立国語研究所報告—日本語話し言葉コーパスの構築法」124, 国立国語研究所

高橋圭子（2005）「対称詞研究のダイナミズム—ポライトネスおよび指標性の観点から—」『言語情報科学』3, 129-143, 東京大学

高見健一（1995）『機能的構文論による日英語比較—受身文、後置文の分析—』くろしお出版

田窪行則（1997）「日本語の人称表現」田窪行則（編）『視点と言語行動』13-44, くろしお出版

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

仁田義雄（1997）『日本語文法研究序説』くろしお出版

丹羽哲也（2006）『日本語の題目文』和泉書院

野田尚史（1996）『「は」と「が」』くろしお出版

野村雅昭（1994）『落語の言語学』平凡社

林博司・水口志乃扶・小川暁夫（2005）「項の「文的」解釈と「発話的」解釈—呼びかけ詞の対称言語学的考察」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『活動としての文と発話』253-288, ひつじ書房

東出朋（2019）「呼びかけ語をめぐる諸問題の検討と定義の提案」『日本文化学報』82, 103-121, 韓国日本文化学会

藤井洋子（1991）「日本語における語順の逆転—談話語用論的視点からの分析—」『言語研究』99, 58-81, 日本言語学会

藤井洋子（1995）「日本語の語順の逆転について—会話の中の情報の流れを中心に—」高見健一（編）『日英語の右方移動構文—その構造と機能—』167-198, ひつじ書房

前原かおる（2000）「呼びかけの特徴—題目との接近可能性—」『広島大学日本語教育学科紀要』10, 57-64, 広島大学

丸山直子（1995）「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19(8), 365-380, 計量国語学会

宮崎和人・野田春美・安達太郎・高梨信乃（2002）『モダリティ—新日本語文法選書4』くろしお出版

Maynard, Senko. K（2001）Expressivity in discourse: vocatives and themes in Japanese, *Language Sciences*, Volume 23, Issue 6, 679-705.

李到宮（2006）「落語の談話空間」『早稲田日本語研究』15, 59-70, 早稲田大学日本語学会

綿貫啓子（2006）「日本語の後置文：左方移動文との相違」『Scientific approaches to language』5, 251-268, 神田外語大学